富岡製糸場総合研究センターだより
No. 34
（2023年12月発行）
富岡製糸場をもっと楽しむための豆知識をお届けします！

生垣には大きな穴

富岡製糸場の周囲を見ると、ぐるりとコンクリート塀で囲われています。創業当時から今に至るまで、工場の敷地と街の境界は塀によって分けられていました。場内で集団生活をしながら仕事をしていた工女が外出する時は、正門で門衛（もんえい）の許可をもらう必要がありました。休みの日や仕事終わりに街中へ息抜きの外出は出来ましたが、気軽に出入りをするのは少し難しかったようです。

さて、大正時代の塀にまつわるエピソードを紹介します。工女はまだ幼い年齢の娘も沢山いました。親元を離れての慣れない集団生活や初めてのお勤め、お給料をいただける嬉しさとは裏腹に、寂しさや仕事の辛さもあったようです。そんな気持ちをホッと埋めてくれたのが「飴玉」「カリントウ」などの駄菓子を頬張（ほおば）ることでした。これらの品を日々入手するため、内と外との結界（けっかい）を破る秘密の抜け道がありました。かつて場内の北側にあった生垣には大きな穴があり、外には駄菓子屋の主人が待機、工女はその穴からお金を払い、品を受けていました。また、この穴は勢いが過ぎる年頃の工女の夜遊びへの抜け道にも使われたようです。

今も富岡製糸場の周辺の路地にはお菓子屋や食堂が点在しています。工女の心とお腹を満たしたであろう街中散策も、ぜひ一見（いっけん）あれ。

【参考資料】　『富岡製糸場誌』工女の思い出（ききがき）

バックナンバーはこちらから▼

◆発行◆
富岡市世界遺産観光部　富岡製糸場総合研究センター